戦争を知らない世代へ ⑪ 広島編

# 広島・閃光の日・30年

創価学会青年部反戦出版委員会

第三文明社

戦争を知らない世代へ ⓫ 広島編

# 広島・閃光の日・30年

創価学会青年部反戦出版委員会

第三文明社

戦争を知らない世代へ⑪
広島・閃光の日・三十年

昭和50年8月6日　初版第1刷発行

編　者　創価学会青年部反戦出版委員会
発行者　山崎善智
発行所　株式会社　第三文明社
郵便番号　101　東京都千代田区猿楽町2-5-4
電話東京(294)8731(代)　振替口座東京117823
印刷所　凸版印刷株式会社

©1975 printed in Japan　0036—7011—4438

# 発刊に寄せて

閃光の日から三十年――今では原爆ドーム以外に、広島のどこを捜してもあの日の爪痕とじかに接することはできなくなった。

「ここまで復興するのにどれだけ多くの市民が汗と涙を流しただろうかと考えると胸を締めつけられる思いがする」との感想をもらしたのは演奏旅行で広島を訪れたジャズ・ピアニストのハービー・ハンコック氏。彼が「平和の街のために」と題した曲を作って広島市へ寄贈し、話題を呼んだのはつい先日のことである。

果たしてあの恐怖と苦渋に満ちた体験は遠い過去のものになったのであろうか。

昨年に引き続き、広島での被爆体験第二集が上梓のはこびとなった。私たち創価学会広島青年部のメンバーは、ここに集録された被爆体験者およびその子孫の生きざまの中に、真実の平和への叫びが込められていることを知っている。その悲しい体験、心の痛みを自分のものにし、語り伝える被爆体験継承の運動を更に推し進めたいと思う。

昨年八月に出版した『広島の心――二十九年』は広島県内の高校と広島市内の中学校に贈った。

今回も同様に贈呈することになっている。いわゆる戦争を知らないこれら若い世代の反応は極めて鋭い。また、こうした青少年の心の中に新しい平和指向の胎動が感じられる昨今である。

この本が平和への潮流に加速をつけ、未来に生きる若者に対して啓発の書となればと願っている。

最後に本書の出版の労をとられた東京の反戦出版委員会と第三文明社の方々に心から感謝したい。

昭和五十年八月

創価学会青年部
広島県青年部長　品川正則

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

# 目次


発刊に寄せて

悪夢の三日間……篠田親人 8

生活のため野菜どろぼうも……梶矢澄江 13

内臓をもとかす原爆……国田玉枝 16

核戦争の時代せまりくる……工藤　保 18

父と娘の感激の出会い……上本留里子 23

廃墟の中、捜し求めて……有田田鶴子 29

母の体験から自己の使命知る……木村弘二 34

父の体験をようやく聞く……貞森初美 38

燃える家にただ呆然と……東岡ハル子 41

どこを見ても焼野原……川沢英一 43

戦争は二度とイヤだ……和田静子 46

生きている心地もせず……大久保ミサエ 49

ガラスのささった足……大津賀ヨシエ 51

寝る家も食べものもなく……鶴田　忠　55
行方不明の我が子と二十九年目の再会……竹村静子　57
原爆の責任、誰に問う……竹原君枝　61
不安と恐怖のなかで……村上徳枝　64
私の平和への希い……山本雪子　67
生涯平和を叫びつづける……宗山久子　69
皮がはがれて白い肉……三藤　博　73
被爆当時……実国鈴子　78
今も目に痛みが……城尾民子　81
ああこれが本当の地獄だ……米田晃好　84
息子と面会中に……桜井キヨコ　89
死体の山を焼いた私……畠本定子　92
戦争をなくすために……奥山フミ子　95
被爆二世の使命……河野真理　98
母の体験した八月六日……山本礼子　102
父の被爆体験談……中村佳男　105

二十万余の死……安井清人 108
ガラスの破片が目の中に……達野八重子 111
姉を捜し続けて……浅松カツ子 118
愛する子を失くして……入田ヤスヨ 120
幼なかったあの日……向井初子 123
素足でとけたアスファルトの中へ……寺戸美智子 125
業火の一夜……岡谷久子 132
愛する両親を失って……藤井艶子 137
同僚を捜し求めて……小笠原義男 141
皆の励ましにようやく生き抜いて……佐々木チヅ子 144
被爆体験記……小野　繁 148
編集後記　158

# 広島・閃光の日・三十年

# 悪夢の三日間

篠田親人

疎開作業の集合地である比治山橋で被爆。父は昭和四十一年に胃ガンで死亡。妻と娘二人の四人家族。四十二歳。

八月六日、今日も朝から良い天気だ。警戒警報解除の報せを聞いて制服に帽子、雑のうを持って疎開作業の集合地である比治山橋へと向った。集合時間を待つ間、皆と橋の欄干にまたがって煎り豆を分け合って食べた。

「集合」の合図と共に朝礼、簡単な作業の説明があって解散し、それぞれの持物を置く大型防空壕へと急いだ。鞄を置いた時、誰かが「何か赤いものが落ちて来るぞっ」というのが聞こえた。汗ばんだ制服を脱いで振り向くと同時に強烈な光を受けた。顔、腕、肩に異様な痛みを感じ、真暗になった。赤、黄、青、紫の異様な色が私の脳裏をかすめた。そして轟音、その瞬間身体が宙に浮き、吹き飛ばされた。

気がついてみると咽喉が痛い。煙のようなものが壕一ぱいに立ちこめている。天井からバラバ



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

ラと砂粒が落ちてくる。身体が動かない。みると級友の足や頭が重なり合って砂に半身埋もれていた。

皆なそろそろ起き上がりだした。壕の外へ出た。皆なの顔も腕もただれて赤身が出ている。自分の腕を見ると皮膚がめくれてゴムが焼けてくっついた様になっている。付近の風景は無残な姿に変っている。級友の一人のゲートルから煙が出ている。「川へ入れ、川へ入れ」と大声で叫んだ。

見ると比治山橋の彼方に巨大な雲の塊りが上がっている。先生の姿が見えない。私達はただ右往左往するばかり。誰いうとなく「病院へ行こう」「家へ帰ろう」「学校へ帰ろう」といいながら、級友達は少なくなっていった。

私はとりあえず家に帰って病院へ行かなければと、先刻来た道を引き返した。病院(現在の県病院)と我が家は百五十メートルしか離れていない。倒れていない我が家を横目で見ながら病院の門を入った。

異様な負傷者の群れで病院の玄関前広場はごった返している。白衣の看護婦が血に染まりながら負傷者の間をとび廻っている。「薬をつけて下さい」と看護婦の一人に声をかけたが、私程度の負傷者には目もかけてくれない。夏の日射しは容赦なく傷口を焼く。池の水を手に受け、傷にかけて冷やしていると、後から軍人に声をかけられ「この名刺を持って高等学校へ行って連絡を

とってくれ」「解りました」と挙手の敬礼をしながら名刺を受け取って病院を出た。

高等学校へ着き連絡を終えた。軍人が校庭にある動くトラックを物色している。その内の一台に私も乗れという。運転台の床に穴が開いていて地面が後ろへ後ろへと消え去るのが見えて、気がつくと御幸橋を渡っている。負傷者の群れは、さらに増え地獄からの帰り道のようだ。電車路に大きな牛が血まみれで横たわっている。

電鉄（現在の広電本社）の近くまでくると、左方向に火の手が上り激しく燃えている。負傷者の群れは急にあわただしくなっている。軍人はトラックを止めると降りて行った。しばらくすると十数人の負傷した女、子供、老人達がトラックの後から乗り込んできた。トラックが一ぱいになるのを確認して軍人は運転台に帰って来た。火はもうすぐそこまできている。私と軍人はただ黙って今来た道を病院へと車を走らせた。

病院へ着くと同時に私は走って家に帰った。家には、父姉兄三人共無事で私が帰って来たのを喜んでくれた。家は建具が吹き飛んで玄関から炊事場の蛇口が丸見えになっている。疲れて少し横になった。前の道路は息絶え絶えの負傷者がひっきりなしに宇品へ宇品へと向っているのが見える。頭の中は空虚になりいつしかうたた寝をしていた。

夜が来た。今晩また空襲があるというデマが飛んでいる。家族と知人十名程で黄金山のふもとで野宿をすることにした。夜露に濡れた夏草が傷口にあたって気持がよい。市内を見ると巨大な

火の柱がいつ消えるともなく燃え広がっている。路を通る人影が逆光に見えて不気味な光景だ。地虫の声を聞きながらいつしか眠っていた。

朝気がつくと顔、腕、肩のあたりの痛みで我に帰った。もやの中で市内はまだ煙がたち込めている。跡かたもおぼつかない家々を探しながら我が家へ帰った。火傷の箇所が水ぶくれになっている。広陵中学に駐屯している軍人に頼んで水を取ってもらったが白い薬で傷口のあちこちが突張る。目まいがして身体が弱っているのが自分でもわかった。

二日目の夜がきた。昨日と同じように今晩も野宿だ。焼跡は空襲にはこないだろうということで、夕闇せまる御幸橋を渡り升屋町へ出た。平野橋のたもとへ着いたころ、薄暗くなった焼け跡のあちこちで火が見える。異様な臭気が鼻をつく。聞けば死者の火葬をしているのだ。アスファルトの固い感触で寝つかれず、寝返りもうてないままに朝を迎えた。

家へ帰る途中、四度目の御幸橋を渡った。欄干は一方向に皆倒されてしまっていて、ふと見るとひき潮に流されたのか死体が数限りなく干潟に打ち寄せられている。紫色にはれ上がって丸太棒のような腕、衣服はひきちぎれ仔牛程の胴が泥に埋まっている。母親が我が児を抱いたままの死体が流れている。私の感覚は傷と疲れで麻痺してしまっているのだろうか。情景があまりにも無残なので自分が生きているのか死んで歩いているのか解らなくなってしまった。

三日目の午後、父が私を連れて故郷の鳥取へ行くことになった。芸備線は動いているという情

報が入ったからだ。家を出て比治山橋を歩いた。一昨日のあの悪夢のような瞬間にあった防空壕へ立ち寄った。帽子も鞄も見当らない。奥まで入って見ると、薄暗い壕の中は今にも異様な光と轟音がまた聞こえてきそうな気がした。駅に近づくにつれ死体の数が増え、路のあちこちに放置されている。こわれた家の梁の下から長い髪が出ているのを見ながら歩きに歩いた。

駅から汽車が出ないので、矢賀駅まで歩くことにした。山越えの途中、民家の人からゆでたジャガ芋を三つ貰って食べた。軍人が死体処理作業をしている。道の両側に一列に並べ強い日射しで異様な臭いがたちこめている中をよけながら通った。

汽車が着いた。窓から乗る。たちまち満員になってしまい、ほとんどが負傷者ばかりだ。薬の臭い、血の臭い、何かわめきながら泣いている人。さながら地獄行の列車のようだ。「ゴットン」動き出した。夢想の中をさまよった三日間の広島を後にして。

十二歳当時の記憶は、今でも忘れることの出来ない事実だ。この事実をゆがめることなく三たび原爆が人類、否地球上に炸烈しないよう願うものである。広島、長崎の被爆者は真の平和のメカッとして、滅亡を前にした人類の最後の記録者として平和を世界に訴えなければならない。

# 生活のため野菜どろぼうも

梶矢澄江

大芝町で被爆。当日、妹死亡。昭和三十四年から四年間入院。それ以来現在まで通院。現在、長男と二人ぐらし、五十二歳。

七時から仕事、一時間くらいたって大きな音と共に気がついた時は、家の下敷きになっていた。不思議に怪我は全くなく子供をおぶって逃げた。大芝町に落ちたとばかり思っていた爆弾がどこに落ちたかわからず、家が気になった。通りはすべて火事で通れない。線路づたいに帰り鉄橋をも渡った。途中気がついて下を見て恐ろしくなったが、引き返すこともできずそのまま渡った。今考えてもゾッとする思いである。

家族ともその日は会えず、翌日弟に会い、一緒に父と母を探しやっとのことで会うことができた。妹は学校の大きな梁の下敷きになったまま死んでいた。母は、目の中へ柱が入り両目がつぶれていた。顔・胸には大きな傷、ものも見えないし耳も聞こえなかった。そのままの状態で治療も何もなく数日間過ごした。

当時私は二十二歳。父も原爆症がひどく、私が一家の中心とならねばならなかった。大芝から新庄へ逃げた時、新庄の畑へ行くと何かがあると思っていたから、モンペを脱ぎその足を結んで肩にかつぎ、毎日新庄まで、もちろん裸足で焼跡を通って、トマト、きゅうり、ぶどうなど野菜どろぼうに行った。それが日課のようになっていた。

その途中で見た光景は全くこの世のものではなかった。白島あたりから兵隊が並んだまま死んでいた。夏だから、火傷して真黒になって倒れたままで、三日後くらいに行ってみると腹の肉など膨張してはみだしていた。

今も一つ忘れられない心残りなことは、小さな男の子が同じ所に避難して火傷のために寝ていたのだが、府中にあるその子の家で父と母が心配しているかもしれないから知らせてほしいと頼まれた。だがどうしてあげることもできず、翌日起きてみるとその子は死んでいた。彼のことを親が心配していただろうと思うと、翌日死んでしまっただけに、今だに忘れることができない。

私もかぜがもとで倒れ、昭和三十四年から三十八年まで四年間入院、それ以来、数々の病気が出てずっと通院。もう会社勤めなら恩給がつくころだ。体のだるさ、下痢、湿疹等は当然とされていて、現在なら入院する必要さえあるとされるくらいである。

八月十五日、終戦の知らせを広島駅へ行って聞いたが誰も信じる者はいなかった。何度もその報道を聞き皆で泣いた。何故、私達だけがこんな苦しいめにあわなければならないのか。情けな



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c